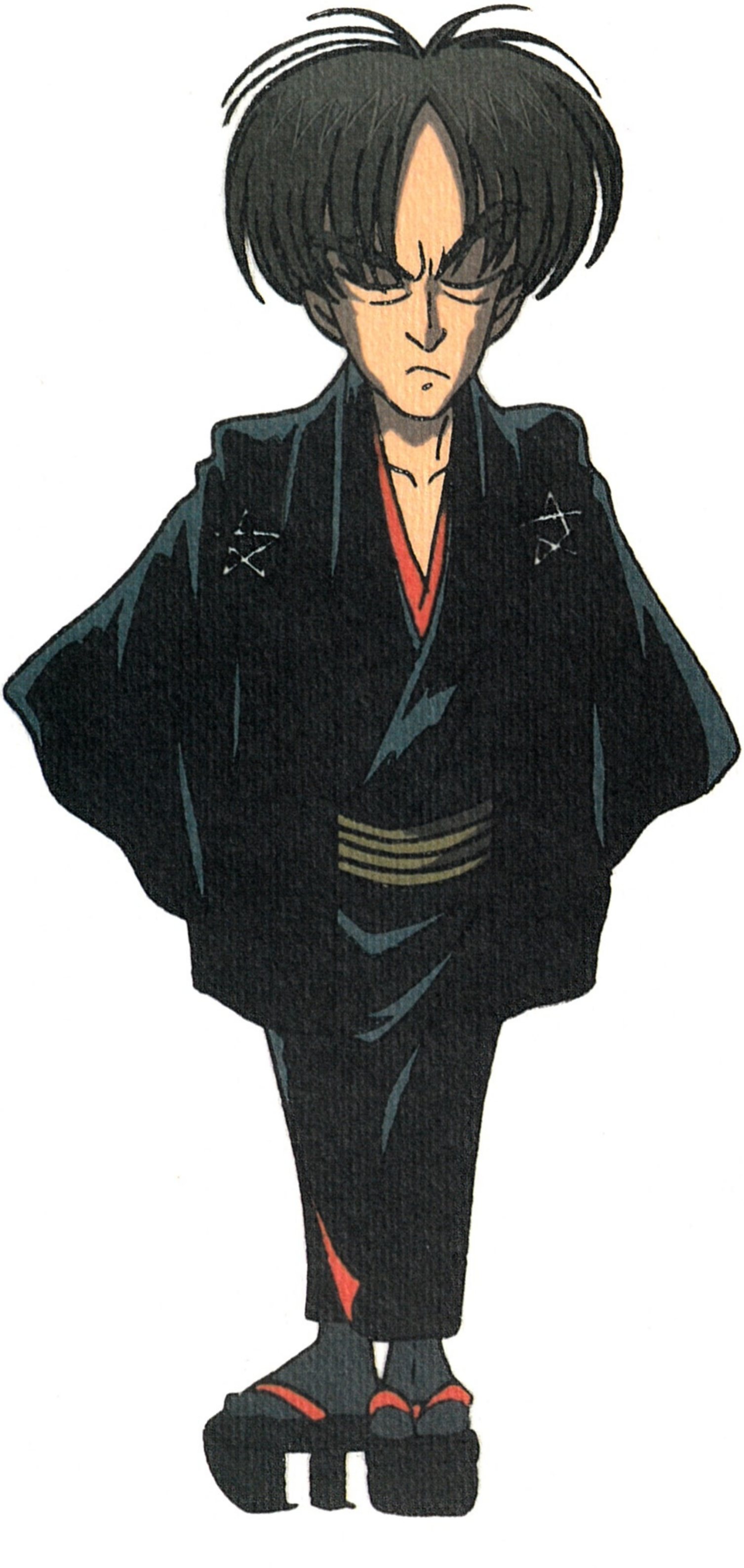
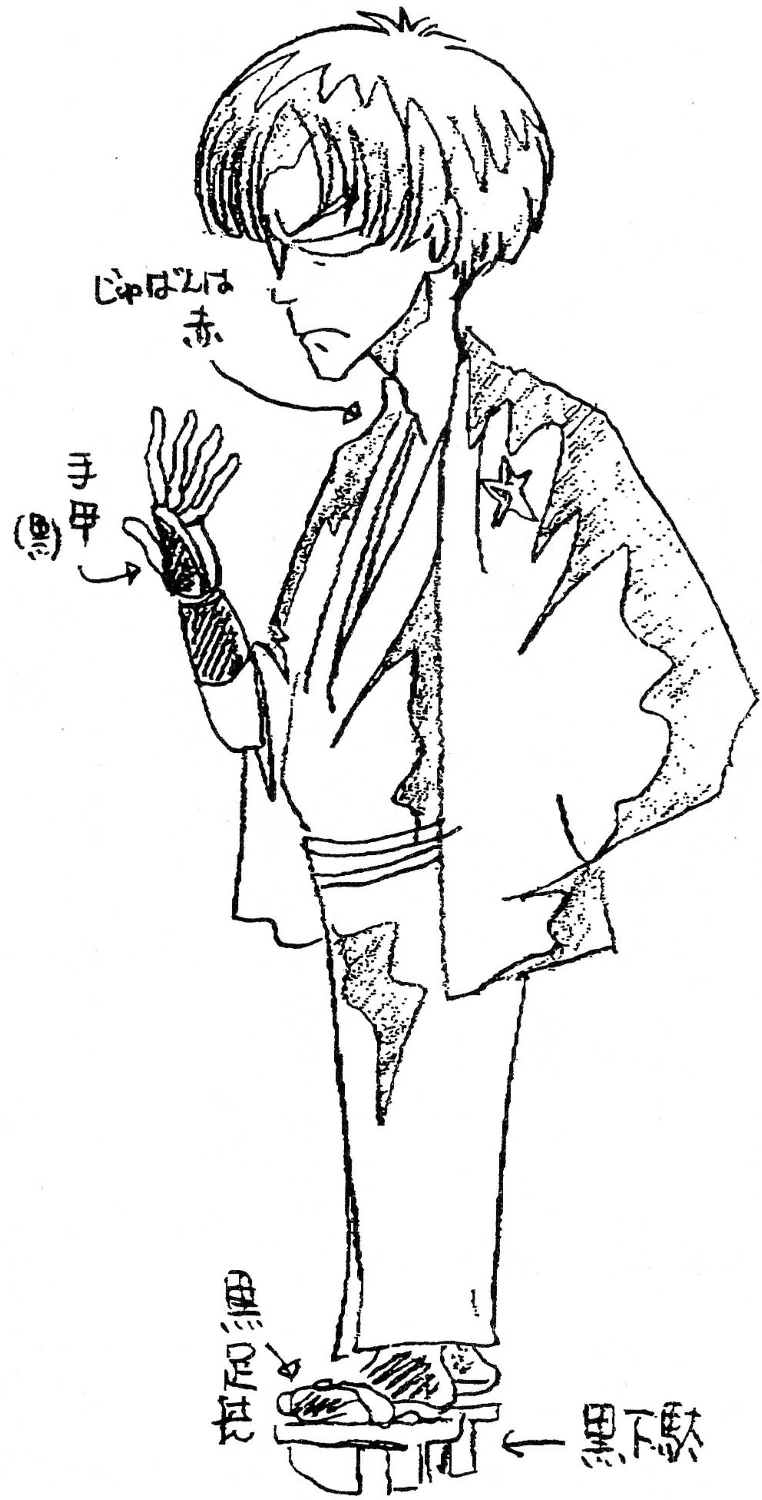


The KITARO


黒羽織
黒の着流し
鼻緒は赤



陰陽道の"言霊使い"一刻堂
京極夏彦自筆キャラクターデザイン

The KITARO

オリジナル・シナリオ

ゲゲゲの鬼太郎

京極夏彦
KYOGOKU NATSUHIKO

言霊使いの罠

ことだま　つか　わな

Traps of the kotodama expert.

講談社

'97年12月28日(日)AM9:00〜9:30
フジテレビ系放映
「ゲゲゲの鬼太郎」第101話

企画	原田冬彦（フジテレビ） 木村京太郎（読売広告社）
プロデューサー	蛭田成一
製作担当	岡田将介
原作	水木しげる （コミックボンボン テレビマガジン たのしい幼稚園 おともだち）連載 （講談社）
シリーズディレクター	西尾大介
脚本	京極夏彦
演出	角銅博之
音楽	和田薫
キャラクターデザイン	荒木伸吾
総作画監督	姫野美智
美術デザイン	浦田又治

作画監督	木下和栄
美術	松宮正純
原画	
仕上	
撮影	
編集	片桐公一
録音	今関種吉
音響効果	今野康之
選曲	西川耕祐
記録	小川真美子
製作進行	坂本憲生知
演出助手	田中雅史

登場キャラクター

役名	摘要	声の出演者
鬼太郎		松岡洋子
目玉の親父		田の中勇
ねずみ男		千葉繁
ねこ娘		西村ちなみ
子なき爺		塩屋浩三
砂かけ婆		山本圭子
一反木綿		龍田直樹
ぬりかべ		龍田直樹
○		
ぬらりひょん		西村知道
朱の盆		郷里大輔

○
宿直の教師　坂本正吾
巫女
○
護法童子
瀬戸大将
式神
○
村上祐子　前田このみ
谷本淳　沼田祐介
鈴木翔太　松井摩味
○
一刻堂　京極夏彦

1 夜の日本家屋（正門前→玄関→廊下）

門柱には五芒星が描かれた提灯が二つ、あかあかと灯っている。
玄関には『一刻堂』と記された偏額がかかげられている。
提灯の間にふわりと和服姿の男の後ろ姿が浮かぶ。逆光で真っ黒である。
影はそのまま音もなく門を抜け戸を開けて、無言で上がりこむ。（ぞうりを脱ぐアップ、框に踏み上がる足袋のアップ）家の中には数人の烏帽子を被り袴を穿いた男や巫女姿の女が忙しそうに行き来している（三方に載せた巻物を運んだり、和綴の本を運んだりしている）。
和服の男（紋付きを着ていることがわかるが顔は解らない）はその中を縫うように、悠然と奥の間に向かう。誰ひとりとして気づかない。
ただひとり、擦れ違いざまに、巫女がはっとして振り返る。しかしもう誰も居らず、首を傾ける。

2 奥の間

男は静かに障子を閉め、当たり前のように振る舞って床の間の前に座る。

懐からキセルを出して一服つける。うまそうに煙を吹き出すシルエット。
どうやらぬらりひょんであることがわかる。

声「何の用かな」

驚くぬらりひょん。げほげほとせき込む。
背後の暗闇に、やはり和服の男がぬっと浮かぶ。

男「ここを何処だと思っている？　まあ、ここまで来ただけでも大したものだと褒めておこうか。さあそこに直れ。祓い清めてやろう」

ぬらりひょん「わるい冗談は抜きです。別に悪気は」

男「妖怪の分際で何をいうか。お前たちは私の前にいるだけで祓われる運命にあるのだ。それを――のこのこ自分からやって来るとは」

ぬらりひょん「お、お待ちくだされ」

男は懐から御幣のついた祓え串を出す。いきなり障子が開いて朱の盆が飛び込んで来る。真っ赤な顔がパンと広がる。

朱の盆「うおう、何をするんだぁ」

男はさっと串を振る。

男「古盆一枚！」

朱の盆はただの朱色の古いお盆になって畳の上に落ちる。

男はその前にすっくと立つ。

男「私の正しい言葉の前には、どのようなまやかしも通じない。そもそもお前たち妖怪はこの世にあってはならぬもの。いること自体が間違いなのだ！　さあ次は貴様だ、ぬらりひょん！」

男が鋭い眼で睨む。

ぬらりひょんは腰を抜かし、畳の上のお盆を見てから手をかざして、

ぬらりひょん「さ、さすがは陰陽道いかるが流、言霊使いの一刻堂さん、た、たいした腕前。だがちょ、ちょっと待って下さいよ。あなたのご先祖とこのぬらりひょんが五百年前に交わした約束を――」

一刻堂「約束？　なんだそれは」

ぬらりひょんは床の間の前まであとずさり、後ろ手で床の間に飾ってある巻物を掴む。

一刻堂「それはわが家秘伝の――」

取り上げようとする一刻堂を止めて、ぬらりひょんは巻物をさっと広げる。

ぬらりひょん「ほらここに。これ、ここ見て下さい。これは私の字です。サインしてあるでしょう？　で、この判子はお宅の判子でしょう」

3

タイトル

ぬらりひょんが指を指す。一刻堂は巻物を取り上げる。

一刻堂「ナニ。今から五百年の後、一刻堂の当主は、私こと妖怪王ぬらりひょんに必ず手を貸すこと？　なんだこれは？　なんで私が妖怪なんかに手を貸さなければならんのだ？」

ぬらりひょん「この秘伝の巻物を手に入れる際に、私、協力したんですよ」

一刻堂「そんな話は聞いていないぞ」

ぬらりひょん「本当ですよぅ。これ、ご先祖様の署名捺印してありますし」

一刻堂「ふん。先祖は先祖だ。私はいやだ」

ぬらりひょん「でも約束ですからねえ。今日でちょうど五百年なんですよ」

一刻堂は考え込む。

ぬらりひょん「書いてあることは守らなきゃ。私、これでも妖怪弁護士です」

一刻堂「ううん……で、何をすればいいんだッ！」

ぬらりひょん「簡単なことです。あなたのお仕事そのままですよ。妖怪を四五四、祓い落として貰いたいのです。鬼太郎という、いやーな子供をねぇ」

言霊使いの罠！

4 夜の学校

暗い廊下。宿直の教師（体育会系）が夜警のために歩いている。
いきなり火炎を吹く車輪を足につけた護法童子ががらがらと音を立てて廊下を飛んで行く。悲鳴を上げる教師。

教　師「ま、また出たァ！」

屋上では不思議な格好をした小鬼どもがダンスを踊っている。
宿直の教師、腰を抜かして這うように校門を出ようとしている。
眼の前を黒いものが遮るので顔を上げると、巨大な瀬戸大将が立っている。
教師は気を失って倒れる。

5 朝の登校風景

翔　太「ねえ、聞いた？」

淳　「聞いた聞いた。まったすンごいのが出たんだって？」

翔太「そう。関口先生が伸びちゃって。大丈夫かなあ。うちのガッコ」

淳　「だって昼間はなんともないじゃん。それに、とって食われるわけじゃなし」

祐子「でも、関口先生はともかく、この前はあの木場先生でしょう？　体育の」

淳　「一見強そうな奴ほど度胸がないの」

翔太「でもこのままじゃ先生達みんなやられちゃうよ。先生が来なくなっちゃう」

祐子「手紙、出す？」

翔太「妖怪……ポスト？」

淳　「最近忙しいんじゃないの？」

6　妖怪ポスト

手紙を入れる三人。
ねずみ男が陰から見ている。

7　社の前

ねずみ男、パンパンとかしわ手をうち、それからさい銭箱を覗く。

ねずみ男「ケッ。しけてるねえ。ゴミしかはいってないじゃないの。まあこのご時世だ、神頼みより金頼みって気持ちはわかるがな。おッ百円みっけ」

と手を突っ込む。

声「何をしている」

ねずみ男「あははは、ゴミを取ろうかなーなんて思っちゃったりしているところですよう。最近の人間どもは信仰心てぇものが欠落していやすから」

声「いいから報告をしろ。私は忙しいんだ」

ねずみ男こそこそと階段を上り、扉の前に畏まる。

ねずみ男「忙しいってったってそうやって本ばっか読んでるだけじゃねえかッて、おお、何でもありません。何でもないですよう、睨まないで」

神社の中では一刻堂が本を読んでいて、ぶつぶついうねずみ男を鋭い目で睨み付ける。

一刻堂「手紙は？」

ねずみ男「入れやしたぜェ旦那。ガキどもは素直ですから。これで鬼太郎はまあ、今日か明日にゃあ元気いっぱいやって来るでしょう。それで、そのぅ」

ねずみ男、格子戸からそっと手を差し込む。報酬を要求している。

一刻堂「仲間は来るか」
ねずみ男「そのへんはぬかりございません。ですからそのぅ」
一刻堂「どうぬかりがない」
ねずみ男「そりゃ、あいつは最近ひとりじゃ動きませんや。大体ババァだのジジイだのがくっついて保護者同伴で」
一刻堂「そういう不確実な憶測が聞きたいのじゃないんだねずみ男君」
ねずみ男「はァ？」
一刻堂「私は見ての通り忙しいのだ。効率よく退治するためには一網打尽にするしかないだろう。そのために君を雇ったのじゃないか。いいかね。鬼太郎に連なる妖怪どもを全員一度に呼び寄せるのだ。私が出向くのはそれからだ」
ねずみ男「腰が重いなあ。でもあいつらぁあれで、揃うとツオイですからねぇ」
といいつつ心の中で、
ねずみ男（……まーいいか。この男がやられたって別に俺様が困るわけじゃなし。しかしやっぱり先に貰うもの貰っとかねぇとなあ……）
ねずみ男「わかりました。じゃあそのまえに」
と、また手を出すが、祓え串で叩かれる。
一刻堂「早くしないと呪い殺すぞ！」

ねずみ男、見幕に押されて階段を転げ落ちる。

8 鬼太郎の家

目玉親父は相変わらず茶碗風呂に入っている。
鬼太郎が手紙を見ている。ねこ娘が側にいる。

鬼太郎「なんでしょう。火のついた車輪に乗った妖怪って……」
ねこ娘「輪入道？　それとも火車？　朧車……じゃないわよね」
目玉親父「さぁて、行って見るまではわからんのう」
ねこ娘「でもおどかすだけなんでしょう？　大したことないわ。きっと悪戯よ」
鬼太郎「悪戯にしちゃたちが悪いですよ。先生達、ショックで寝込んじゃったそうです。父さん、僕行ってきます」
目玉親父「行くって、今から行くのか？」
鬼太郎「出るのは夜だそうですから、今から歩いて行けばちょうどいいですよ。もし悪戯ならやめるように説得します」

鬼太郎はさっさと出掛けてしまう。

ねこ娘「ああ、待ってよ。あたしも行くよう」

ねこ娘ちょっと間をおき、リボンを直して後を追う。

9 ゲゲゲの森

ねずみ男が鼻歌で何か細工をしている。気配を感じて身を隠すと鬼太郎がやって来る。それを遣り過ごし、ねこ娘が追って来るのを確認して再び身を潜め、ねこ娘が通り掛かった瞬間、ロープを引く。ねこ娘足を取られて転ぶ。

ねこ娘「いったあい。何よこれ。ひどいじゃない。からまって取れないよう。何よもう、あら？　鬼太郎！　鬼太郎！　やだ、見失っちゃったじゃないのよ」

ねずみ男「おやぁ？　ネコちゃんじゃないの？　何してんのよ」

ねこ娘「何してんのよじゃないわよ。なんであんたがここにいるのよ！」

ねずみ男「そりゃあ鬼太郎に用があンのよ。鬼太郎はいねェのか？」

ねこ娘「今そっち行ったでしょ。会わなかった？」

ねずみ男「会わなかったけどなぁ。そうか、行っちまったかぁ。一足違いだ。学校だろう？　まずいなあ。うんまずいまずい。こりゃすッげーまずい」

ねこ娘「まずいって何がよ？」

ねずみ男「学校の妖怪退治だろう。ありゃあお前、罠だぜ」
ねこ娘「罠？」
ねずみ男「そう。鬼太郎を呼び出してコテンパンに……いや、息の根を止めちまおうって罠よ。それにしたってまたぞろあの学校だぜ。変だと思わなかったのか？」
ねこ娘「じゃあその……妖怪って？」
ねずみ男「どんな妖怪さんかは知らねえけどもな。相当の大物だぜ。なにしろ鬼太郎をやろうってんだからな。バックにはぬらりひょんがいるらしいしヨウ」
ねこ娘「ぬらりひょんか……待ってよ。なんであんたがそんなこと知ってるの！」
ねずみ男「そりゃあその雇われ……いや、立ち聞きしちゃったのよ〜ん。偶然になァ。いやあ偶然だったなあ。すげえ偶然だ。うんうん」
ねこ娘「なンか怪しいわね」
ねずみ男「怪しかねェよ。俺が敵の手先だとか思ってるのかァ？　ならなんだってこうやって知らせに来るんだ？　俺ってすげェ親切じゃねえか。いいか、ねこ娘、鬼太郎だけじゃ危ねえ。子なきに砂かけ、それから一反木綿にぬりかべ、それからあの親父も連れて、鬼太郎を助けに行けよ。俺は怖いから行かねぇけどな」

ねこ娘「本当なの……」

　ねこ娘わずか思案の末、鬼太郎の家に向けて走り去る。

ねずみ男「はァ、単純だねぇ。それに俺も嘘ついたわけじゃねえし……ん？」

　背後に一刻堂が立っている。

ねずみ男「うひゃあ、い、いつからそこに」

一刻堂「最初から」

ねずみ男「ひ、人が悪いなぁ、あッ！　あの、あれはその、そう。本当のこといっちまった方が話が早くってですね、その決して、決して裏切ったわけじゃ」

一刻堂「誰もそんなことは聞いていないよ、ねずみ男君。なかなか良い作戦だったな。さてそろそろ日が暮れるな」

　一刻堂は遠くを見て眼を細め、懐から紙を出してフッと飛ばす。紙はカラスになって飛んで行く。

ねずみ男「手品ですかい？」

一刻堂「式だ」

鬼太郎が校庭に現れる。
夕焼けに影が伸びている。妖気アンテナは反応しない。
鬼太郎「おかしいな……」
あちこち歩き回るが一向に反応がない。
鬼太郎「学校の中……なのか」
夕焼け空が徐々に暗くなる。
カラスが一羽、大きく円を描く。鬼太郎それを見上げる。
鬼太郎「あの……カラス」
カラス、ふっと紙きれになり、ひらひらと舞い落ちる。
その時、いきなり地面が割れて瀬戸大将が現れる。
鬼太郎「お、お前は！」
不思議な声で吠え、瀬戸大将は手にした鉾でついてくる。転がるように
逃げる鬼太郎。かたかた音を立てて追ってくる瀬戸大将。
鬼太郎「なぜ！」
どかん。と地面に鉾が突き刺さる。間一髪で除ける鬼太郎。
鬼太郎「なぜこいつ、妖気がないんだ！」
瀬戸大将は無言で攻撃を続ける。鬼太郎はじりじりと校庭の真ん中に追

い込まれる。ちょうど中央についた時、地面から小鬼が十匹。次々と生えてきて鬼太郎の手足を掴む。

鬼太郎「うわあ! 何だ!」

襲いかかる瀬戸大将。

× × (C・M) × ×

襲いかかる瀬戸大将。地面からぬりかべが登場、鬼太郎の盾となる。

鬼太郎「ぬりかべ! どうして!」

砂かけばばあ「鬼太郎、これは罠じゃ!」

砂かけばばあと子なきじじい、ねこ娘が、一反木綿に乗って上空を飛んでいる。ねこ娘の襟には目玉親父もいる。

鬼太郎「罠?」

小鬼は後から後から鬼太郎にしがみつく。ぬりかべと瀬戸大将は押し合うようにして校庭の端まで移動する。鬼太郎は小鬼を振り払うが埒があ

かない。

目玉親父「鬼太郎！　おい一反木綿、早く降ろしてくれ」

その時学校からがらがらと音がして護法童子が飛び出して来る。

護法童子は手にした刀で一反木綿に斬りかかる。

一反木綿「危なかァ。なんばすっとねん」

なおも斬りかかる護法童子。しかも車輪の炎が一反木綿を焦がす。

子なきじじい「こりゃ木綿、ちゃんと飛ばんか。落っこちてしまうわい」

一反木綿「そぎゃんこついってもおいどんは刃物も火も苦手たい。これ、やめんしゃい。やめ！」

一反木綿は大きく旋回し、子なきと砂かけが振り落とされそうになる。

ねこ娘は必死で捕まっている。

ねこ娘「鬼太郎！　助けて」

鬼太郎「ねこ娘！」

毛針を発射するが効き目がない。そのうえ小鬼は纏わりつくし、落ちそうな子なきと砂かけが気になるのでうまく戦えない。

ぬりかべは瀬戸大将におされて地響きを立てて倒れる。瀬戸大将は、その上に勝ち誇ったように立ちはだかり、とどめを刺そうと鉾を振り上げ

る。

鬼太郎「ぬりかべ！」

その時子なきじじいが遂に落下、子なきは空中で石に変化し、そのまま校庭の端に落下する。ずしんと轟音が響く。子なきは地面にめりこむ。

途端に瀬戸大将の動きが止まる。

鬼太郎「何だ！　どうなったんだ？」

地面から子なきが顔を出す。

子なきじじい「鬼太郎、こんなものが埋まっておったぞい」

手には欠けた茶碗を持っている。

子なきじじい「落ちた拍子に割ってしもうたがなあ」

途端に数匹の小鬼が子なきに纏わりつく。

子なきじじい「なんじゃお前ら。気持ちの悪い、ええいうっとおしい！」

子なきが手を振り回す。茶碗が飛んで砕ける。すると瀬戸大将は多くの瀬戸物に分解して、次々ぬりかべの上に落下し、粉々になる。

上空のねこ娘の襟にしがみついていた目玉の親父がそれを見て怒鳴る。

目玉親父「わかったぞ鬼太郎！　それは式神じゃ。そいつらは本体じゃあないぞ。戦っても無駄じゃあ」

鬼太郎「式神？」

目玉親父「そうじゃ。人間が操っておるんじゃ。瀬戸大将は、実体はあるが幻覚じゃ。その茶碗が式の本体、ひゃあああ」

目玉親父が振り落とされる。

鬼太郎「父さん！」

間一髪でキャッチする。

砂かけばばあ「目玉の親父殿！　大丈夫か！　おい鬼太郎、どこかにその茶碗のようなまじないものがあるぞ！　それを探せ！　おう危ないッ」

護法童子の攻撃が続いている。

目玉親父「そうじゃ。おばばのいう通りじゃ。おい、こいつらはどこから湧いてきたんじゃ？　きっとこいつらの出てきた場所に式の本体があるぞ」

鬼太郎「わかりました！　それならあそこだ！」

鬼太郎は校庭中央の土の中を狙って下駄を飛ばす。下駄が旋回して土を掘り起こすと、そこに古道具が埋まっている。鬼太郎は駆け寄ってそれらをムチで粉砕する。次々に小鬼が消えて行く。しかし護法童子は益々暴れ狂い、ついに一反木綿に引火する。煙を出して急降下する一反木綿。

一反木綿「わああ、こらまずかあ。あちちち」

鬼太郎「一反木綿！」

一反木綿は尻尾に火がつき、超低空飛行で旋回する。まず砂かけが落ちる。

追いかける護法童子。ねこ娘は何度か地面にバウンドする。

ねこ娘「痛いッ。あちッ。きゃあ痛いよッ。熱いよう一反木綿」

一反木綿「それはおいどんも一緒でごわすよう」

ねこ娘は地面を引き摺られて遂に手を放す。一反木綿はそのまましばらく飛んで不時着する。鬼太郎は最後の道具を壊して、子なきの腕に食いついていた小鬼が消える。

その時、急に空の色が変わる。鬼太郎と目玉、子なき、砂かけ、一反木綿、ぬりかべ、ねこ娘が一瞬光る。

ねこ娘「なに！ やだ、動けない」

屋上に人影。一刻堂である。

11 校舎屋上

屋上からの眺め。鬼太郎を中心に、五人は丁度等間隔に円を描いて配置

されている。それぞれを光る直線が結び、五芒星が浮かび上がる。
屋上フェンスの上に立ち、一刻堂がそれを見下ろしている。
やはり屋上の校舎の陰からぬらりひょんと朱の盆が覗いている。
ぬらりひょん「ほらよく見ろ。あれが五芒星の秘術じゃ。あいつら一歩も先へ進めんぞ。ざまを見ろ！」
朱の盆「うわあ、すごいなあ。それにしても、またうまく星の形に落っこちたもんですねぇ」
ぬらりひょん「馬鹿者。あいつらがどこに落ちるかも計算済みなんじゃ。鬼太郎を中央におびき出すように、式をあそこにうずめたんじゃろうよ」
朱の盆「ひゃあ。そううまくいきますかねえ」
ぬらりひょん「いってるじゃないか。大したものだ。恩は売っておくものだなあ。さて、最後の仕上げじゃ。良く見ておけ」

12
再び校庭

見上げる鬼太郎。
鬼太郎「誰だ！」

一刻堂「憑物落としの拝み屋ですよ」
鬼太郎「その拝み屋が何のためにこんなことを！」
一刻堂「君に怨みはないがね鬼太郎君。縁あってお祓いを頼まれた」
鬼太郎「お祓い？　何のお祓いだ！」
一刻堂「何をいっているのかね。もちろん君達を祓うのさ。拝み屋は幽霊妖怪を祓うのが仕事。そして君達は妖怪じゃないか。この世に巣くう悪しきものだ。いいかね、この世に不思議なものなどない。だから君達のようなものはいらない」
鬼太郎「なんだって！」
ねこ娘「ゴミじゃないんだからッ！　いらないって何よッ」
一刻堂「ないモノがあっては困るのさ。君達は今、私の打った式を見ただろう？でもあれは幻覚だ。今風にいえばバーチャルリアリティーだよ。見えるように触れるように、ちょいと仕掛けをしただけだ。今君達が戦っていた式神はことごとく存在しなかったんだ。ほら、小鬼も瀬戸大将も最初からいなかったのだよ。ふふふ、その証拠に君達は式神を倒したのじゃなく、式の元を壊しただけだ」
砂かけばばあ「黙れ。何をたくらんでおる！」

砂かけは屋上に向けて投げかける。しかし屋上には誰もいない。いつのまにか校庭の中ほどに一刻堂が立っている。

一刻堂「そもそも君達は最初から存在しないのだよ。すべて――作りごとだ」
ねこ娘「馬鹿いってんじゃないわよ！　あたしはちゃんとここにいるわ！」
一刻堂「そうかな？」
　不敵に笑ってねこ娘の前に歩み寄る。異様な目の光りがねこ娘を捉える。
一刻堂「それじゃあ聞くが、君の名は何という？」
ねこ娘「え？　そんな……私は……」
一刻堂「なぜすっと出てこないのかな？　自分の名前だよ。ほうら、わからないんだ。じゃああの爺さんは何という名だ？」
　ねこ娘、いわれるままに子なきじじいを見るが名前が出てこない。
子なきじじい「何を考えとる！　わしじゃわし。わしは、ええと……」
　一刻堂はさらに愉快そうに一同を眺める。
一刻堂「そうだ。君達は名前がない！」
　一同ぎょっとなる。
鬼太郎「何を……そんな」
一刻堂「いいや、名前はないのさ。思い出せないんだろう？　名前がないものは、

存在しないに等しいのだ。だから君達は存在しない！」
砂かけばばあ「何をくだらないことといっておる！　わしは……ええと、何でもいいわい！　わしはわしじゃ。これでも食らえ！」
砂をかけるがすっと除ける。
一刻堂「おお、砂をまき散らすのはつむじ風！」
いわれた途端、砂かけばばあは一陣の風と共にくるくると回り、砂の山になってしまう。驚く一同。
鬼太郎「……おばば！　ええと」
目玉親父「まずい。そいつは言霊を使うぞ。そいつの言葉を聞くな！」
一刻堂「もう遅い！　見ろ。あそこにはきれが一反！」
鬼太郎が見ると一反木綿のいた場所には白い布きれがあるばかりである。
一刻堂「そこには朽ちた壁！」
ぬりかべは崩れた土壁になっている。
ねこ娘「いやだ！　みんな、みんな、さっきまで――」
一刻堂「さっきまでなんだね？　さっきからあそこには、砂山と土壁と布きれがあるばかりだ。最初からね」
子なきじじい「何をいっておる。そこにはええと……その砂山のところに居ったの

は誰じゃったかなあ。ええ、えらく懐かしい顔が浮かぶんじゃが……それにそこに落ちておるきれも……ううん？」

一刻堂「かぼちゃがぺらぺらしゃべっちゃおかしいなあ」

ねこ娘「かぼちゃ？」

子なきじじいのいた場所には大きなかぼちゃが落ちているだけである。

13 校舎の陰

ぬらりひょんと朱の盆が食い入るように見ている。

朱の盆「すごいすごい。かぼちゃになっちゃいましたよ。うん？　最初からかぼちゃだったのかな？　ぬらりひょんさま、あそこにいたのは誰でしたっけ？」

ぬらりひょん「馬鹿もの。あそこにいたのは……ええい、誰でもいいだろう。おまえだって一度はただのお盆になったんだぞ！」

朱の盆「嘘だぁ。どんなトリックです？」

ぬらりひょん「トリックなんかないんだそうだ」

朱の盆「ならぬらりひょんさまは何になるんです？」

ぬらりひょん「知るか。ほら見ろ。大詰めだ」

14

三度校庭

鬼太郎、周りを見渡して狼狽する。

鬼太郎「こ、これはいったいどういう……」

目玉親父「奴の言葉はすべて真実になるんじゃ。聞いたことがあるぞ、確か陰陽道いかるが流……妖怪の天敵じゃ。ええと」

目玉は鬼太郎の名前が思い出せない。泣く。

目玉親父「くくく。息子の名前が思い出せんとは」

鬼太郎は一刻堂を睨み付ける。

鬼太郎「おい！ ぼくはどうなってもいい。仲間を返せ！」

一刻堂「ははは、何を力んでいるんだね。仲間はちゃんとここにいるじゃないか。君の仲間はかぼちゃと砂山と布と壁だ。おっと、それからそこの、ペットを抱いた御嬢さんも君の仲間なんだろう？」

鬼太郎「ペットを抱いた？」

ねこ娘のいた場所には、ねこ娘のような顔をした子猫を抱いた、人間の娘がぺたんと座っている。少女はあたりを見渡して首を傾ける。

ねこ娘（だった少女）「私……こんなところで何してるのかしら」
ねこ娘（だったねこ）「にゃーお」
鬼太郎「……ペットを抱いた御嬢さんって……そこにいたのは」
目玉親父「ううん、最初からああだったような気もするし……いや、騙されちゃいかんぞ、ええと、息子よ。わしらはあいつの言葉に惑わされているんじゃ」
一刻堂「失礼なことをいうなあ。私の言葉が現実になるんじゃなくて、私は真実を語っているだけなんだよ。そもそもその、目玉のオモチャは、なぜそんなに喋るんだ？　ＩＣでも入っているのか？」
鬼太郎「目玉の……おもちゃ？　アッ、ええと、しまったッ！」
一刻堂「いくら流行りだからってこんな悪趣味なオモチャを持ってるとは、最近の子供はどうかしているなあ」
一刻堂はそういいながら鬼太郎に近付き、肩の上に引っ付いているぬいぐるみのような目玉親父を奪い取る。
一刻堂「ＵＦＯキャッチャーでとったのかね？」
鬼太郎「違う！　それはオモチャなんかじゃなくて……もっと、もっと」
鬼太郎は黙り込む。以下、心の声である。
鬼太郎（大事な、凄く大切なものなのに……違う！　ものなんかじゃない。それは……

だめだ！　思い出せない！　でも、そうだ、あそこにいたのも布なんかじゃない。とてもいいやつで……あそこにいたのも壁じゃなくて……あの砂は、とても頼りになる、そう……あのかぼちゃだって……違う。そうじゃないんだ。僕は、僕は誰だ。名前は……僕の名前は）

一刻堂「どうした。オモチャが惜しいのか？」

　鬼太郎は堪え切れず、毛針を発射する。

鬼太郎「違う！　おまえのいうことは嘘だ！　それを返せ！」

一刻堂「髪の毛が飛んだり刺さったりするわけがない！」

　毛針はすべてただの毛になり、地面に落ちる。

鬼太郎「それならこれだッ」

　下駄を飛ばすが、すっと除けられる。

　リモコン下駄は地面に落ちたまま動かない。

一刻堂「危ないなあ。下駄なんか飛ばして。君はそこを動けないんだから、拾いに行けないだろう。仕方がない。私が拾ってやろう」

　一刻堂は下駄を拾う。鬼太郎唖然となる。

一刻堂「何を驚いているんだね？　下駄は飛ばしたら飛びっぱなしに決まっているだろう。さあ、いつまでもこんなお遊びをしている暇はないんだ。困った

子供には御仕置きをしなければいけないな」
上空を見上げる。がらがらと護法童子が旋回している。

一刻堂「あれは私の法力が正しいものであることを保証する護法童子だ。君の負けだよ。さあ、このまま消えてなくなるんだね。君は最初から……」
護法童子が鬼太郎に迫る。一刻堂は祓え串を出して構える。

一刻堂「オンアボギャベイロシャノウマカボダラマニハンドマジンバラハラハリタヤウン！」
鬼太郎は動けない。

一刻堂「さあ、この世にあるべきでないものはこの世にいてはならぬ。遥か遠くの言葉の果てに、去るが良い！」
一刻堂の祓え串が振られ、護法童子ががらがらと迫る。

15 校舎前

ぬらりひょんと朱の盆はもう隠れていない。興奮して踊っている。

ぬらりひょん「やれ！　早くやっちまえ！　見ろ朱の盆、もうすぐ奴は終りだ。わしの天下が来るんだ！」

朱の盆「悲願達成！　それ、消えてなくなれ！」
二人声を揃えて「さらば鬼太郎！」

16　四度校庭

鬼太郎、ぬらりひょん達の声にはっとなる。

鬼太郎「鬼太郎？　そうだ！」

一刻堂が振り向いてぬらりひょんを睨む。浮かれていた二人がぴたりと止まってさっと青くなる。

鬼太郎「そうだ！　僕は鬼太郎だ。ゲゲゲの鬼太郎だッ！」

護法童子に向けて毛針を飛ばす。
護法童子は毛針を除けて旋回する。

鬼太郎「僕は幽霊族の生き残り、鬼太郎だっ！　そうですね父さん！」

目玉親父「と、父さん？　わしは父さん……」

一刻堂の手の中で目玉親父が復活する。下駄が動き出し、一刻堂の腕を振りほどく。目玉はその下駄に掴まって鬼太郎のもとへ戻る。

目玉親父「そうじゃ！　鬼太郎、鬼太郎じゃ。お前はわしの息子の鬼太郎じゃ。そ

うじゃな、ええと、そこの、ねこと……娘」
鬼太郎「ねこ娘！」
ねこ娘が復活する。
鬼太郎「子なきじじい！　砂かけおばば！」
子なき、砂かけが復活する。
鬼太郎「ぬりかべ、そして一反木綿！」
一反木綿がするすると飛んで鬼太郎のもとに来る。
一反木綿「鬼太郎どん！」
鬼太郎「術は解けたぞ！　言霊使い」
鬼太郎はそのまま護法童子に攻撃を仕掛ける。護法童子はがらがらと旋回して応戦するが、砂かけの砂を浴びて、子なきの岩石攻撃を受ける。護法童子はぬりかべにも行く手をはばまれ、さらに旋回し、次第にその輪をせばめて、そのうち一刻堂の上空を小さく回り、徐々に縮んで、やがて何文字かの文字になって一刻堂の懐に入る。一刻堂は祓え串を懐にしまう。
子なき、砂かけ、ねこ娘が一刻堂を取り囲む。ぬりかべが背後に立ち、一反木綿に乗った鬼太郎が下りてくる。

一刻堂は身じろぎもせず、淡々としている。

一刻堂「どうやらこれまでだな。護法が消えては結界もはれぬ。鬼太郎君、君を祓うのは中止だ」

一反木綿で一刻堂の前に降り立つ鬼太郎。集まって来る仲間達。

砂かけばばあ「中止ってお前そんな、そりゃ、負け惜しみか！」

子なきじじい「わしが怖いのか？」

一刻堂「そうじゃありませんよ。あなた方はたぶん何度でも私の術にかかる。何故なら私の言葉が正しいからです。でも――これ以上無駄な争いはやめましょう」

鬼太郎「どういうことです？」

一刻堂「あなた方はこの世にいてはならぬもの。しかしいなければならないものでもある。私はあなた方を消してしまうことを好まない」

鬼太郎「では何故――」

一刻堂「最初にいった通りです。ちょっと縁がありましてね。約束は約束だ。一応守らなくては。だがどうも気分がのらなくてね。これで安心しましたよ。驚かしただけとはいえ、先生方にも悪いことをしましたし。おい！　ぬらりひょん！」

こそこそと逃げようとしていたぬらりひょんが立ち止まり、振り向く。

一刻堂「これで先祖の借りは返したぞ！　私はもう二度と手は貸さぬ」

ぬらりひょん「二度とって一刻堂さん、それじゃ先祖の約束が」

一刻堂「都合のいいことをいうな！　いいか、良く聞け。失敗したのは貴様のせいだ。貴様自身が私の邪魔をしたのだからな。もう約束なんか無効だ」

ぬらりひょん「わし――がですか？　お前じゃないか？」

朱の盆を小突く。朱の盆自分を指差す。

朱の盆「俺？　俺？」

一刻堂「二人ともだッ。おまえたちがこの鬼太郎君の名前さえ叫ばなければ、彼は今ごろ、綺麗さっぱりこの世から消えていたのだ。わかったかこのおろか者め！」

ぬらりひょんは何も答えず、鬼太郎を睨みつけてから再び逃げようとする。

追いかけようとするねこ娘を鬼太郎が制する。

鬼太郎「ほっておくんだ」

逃げる二人に一刻堂が声をかける。

一刻堂「待てぬらりひょん。参考までに教えてやろう。貴様は――」

ぬらりひょん「いわないでくれ。結構。もう結構じゃ！」

といいながら走り去る。

ねこ娘「ホントは何なの？　あいつ」

一刻堂「ああ。タコ。タコだ」

ねこ娘「タコ？　タコかあ」

一同笑う。

そこに後ろを振り向き振り向き、ねずみ男がひょっこり現れる。

ねずみ男「何だァ、ぬらりひょんの奴慌てて……あ？　ああん？　何でェ何でェ、随分と和んでるじゃねぇか。ナニィ？　おいおい、仲直りしちまったのかい？　そりゃあねェだろうぜ」

ねずみ男、一同の間をうろうろする。

ねずみ男「うーむ。この場合、どっちかに勝ってもらわなきゃなあ」

ねこ娘「あんた、やっぱり」

ねずみ男「え？　俺ァそのゥ、いや、おまえにとやかくいわれる筋合いはねーんだよ。ねえ一刻堂の旦那、そのゥ、結果はどうあれ、俺様は労働したんですよ。そのですね、サイテー限の労働報酬は戴かないと、ねェ」

一刻堂「今回は私もただ働きだ。君に渡す報酬はない」

ねずみ男「ない？　ないって。そりゃないでしょーに。まったくこの俺様を誰だと思っていやがるんだァ？　黒い服着てるからって偉そうに。ええと俺は」
一刻堂「忘れたね？　君も消えてなくなりたいのか？」
一刻堂は祓え串を出す。ねずみ男びっくりして後ろに飛ぶ。
ねずみ男「よしてッ！　そんな、俺様はその」
ねずみ男、式が埋まっていたアナに落ちる。
ねずみ男「痛ってぇ。なんだこの穴ぼこはよ。おい、おい金くれよ。おい！」
ねずみ男が顔を出すと、もう一刻堂の姿は消えている。妖怪達も消えて、校庭にひとりぼっちになっている。
ねずみ男「なんだよう！　おおい。鬼太ちゃあん、陰陽道のセンセー！」

17 夕日のケゲゲの森

夕日を見ている鬼太郎と目玉。
鬼太郎「ねえ父さん」
目　玉「何じゃ」
鬼太郎「俺達って、本当は――」

目玉親父「なァに、気にするな鬼太郎。ないと思えば何もない。あると思えばすべてある。わしらを知っている人がいる限り、わしらはここにおるし、こうしてわしらがいる限り、これが現実じゃあ」

鬼太郎「そう――ですね」

夕日はゆっくりと沈む。鬼太郎達の影が長く伸びる。

虫達が鬼太郎をたたえる唄を歌っている。

（つづく）



